

入選

ぼくの恩返し

神奈川県 東菅小学校

六年 木村 守

夏休みの宿題で「詩」を書いた、小学3年のぼく。出品したコンクールで、賞をもらい岩手県の北上市まで行くことになった。

最初、母さんは、北上に行くのをためらった。なぜなら、ぼくは歩けない。車いすでの移動が必要だった。8才でペルテス（骨がえ死してしまう病気）になってしまい、重い装具をつけて生活していた。長い距離は、歩けない。7, 8歩が限界だ。泊まりがけの荷物と車いすのぼくをつれて、新幹線移動。母さんひとりでは、無理だ。でも、ぼくは行きたかった。父さん、兄さんをお願いして、いっしょに行くことになり、母さんが車いす、父さん兄さんが荷物を担当してくれた。

北上駅に着くと、「守さんですか？」という大きな声がした。

つい、家族四人で、返事をしてしまった。東京では、いつも知らない人と話をしてはだめだと母さんは言っていた。ちょっとなまったら、イントネーションがぼくらをゆだんさせた。

おじさんは、役所の課長さんだった。ぼくの車いすを気にして、車で来てくれたのだ。いくつか、名所を案内してくれ、ホテルに送ってくれた。表彰式の朝、ホテルに課長さんは来てくれて、会場まで案内してくれた。

審査員の中に、車いすのおじいさんがいた。車いすで、ぼくと並んで進んでくれたり、がまんの生活をしているぼくの気持ちをわかってくれた。課長さんとおじいさん先生は、ずっとぼくを気づかせてくれた。

表彰式が終わり、「サトウハチロー記念館」に見学に行った。サトウハチロー先生は、ぼくの学校の校歌を作詞した人。その縁で、このコンクールに出品したのだ。遠くから来たぼくに、記念館の人がリンゴをくれた。ハチロー先生ゆかりの木から、とれた実だった。

母さんは、北上の人たちのやさしさに感激していた。息子に、とても親切にしてくれることに「ありがたい」と言っていた。

記念館の人と課長さんが、校歌を歌ってほしいと言った。川崎市で、ハチロー先生が校歌を作っていたのを知らなかったそうだ。はずかしい。下を向いていたら、頭をコツンと母さんがした。親切なみなさんに、歌くらいおかえししなさい。ギロツとした目が言っていた。

兄さんと呼ばいはじめた。ぼくは、一小節で逃げた。兄さんは、三小節。母さんは歌いきった。母さんも同じ小学校の卒業生。

母さんは、息子へ親切にしてくれた人が、ハチロー先生の詩を知りたかったから、今できる精いっぱい恩返しとして、歌いきったんだ。逃げた自分が、はずかしくなった。反省しても、もう遅い。下を向いて、すみっこにいた。カッコ悪いことをしたぼくに、課長さんは、また詩を書いて、出品するようにすすめてくれた。

これからも、詩を書く心を決め、3年連続で北上に恩返しにぼくは行っている。